

『孔子事跡図解』翻字と解題

土屋 育子

凡 例

一、本稿の底本は、『孔子事跡図解』（東北大学附属図書館狩野文庫蔵マイクロフィルム <https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100443486/1?ln=ja>）を用いる。

一、『孔子事跡図解』本文には各挿話の回数、題目がない。そこで、便宜的に各挿話に通し番号を振り、他の『聖蹟図』（明・呉嘉謨『孔聖家語図』など）の題目を流用して仮の題目を付し、【 】で示した。

一、翻刻に当たり、適宜句読点を付した。仮名遣いは原本の通りとする。左側に付されたルビは語句の後ろに〔 〕で、丁数は〔 〕で示した。

翻 字

（見返し）

瑞陽先生口授 不許翻刻／千里必究

孔子事跡圖解

天民・鸞洲二先生畫 高山房梓行

孔子事跡圖解序

有美玉於斯、韞匱而藏諸、求善賈而沽諸。其彫琢既精、則固沽之矣。未遇良工、而尚存瑕類、則其美也未盡、而賈難待也。往昔、有孔子行狀図解者、行于世。開卷則仁蹤德軌、可一覽而見、矩矱童習、莫善焉。然其為書、或繁蕪、或漏脫。要之玉則玉矣、但其微瑕、遂不堪連城耳。頃者、遇高山房高英於叔舅瑞陽先生案下、言及是編。高英欲摭其精華、詳其圖解、以便童蒙之服習、蓋宿志也。即記先生之所口授、乃就天民・鸞洲二民、請為其圖、以上梓。命曰、孔子事跡図解。已成、以示予。典實研確、不復見有微瑕。於是乎、連城珉、善賈可待也已。嗚呼。高英於是編、可謂良工之攻玉也。不啻攻玉、亦能開入德之門矣。童蒙由斯道。

文化乙丑秋七月、張府里景龍識。

こうし しせき つかい
孔子事跡圖解卷之上

【1 禱嗣尼丘】

こうし ろ しやうへいきやうすうゆう うまれ いん のち めい そう くに ひ しけい のち
孔子は、魯の昌平郷陬邑に生給ふ。殷の後に命せられて、宋に國せし微子啓の後にして、
ふつほか たい／＼そう けい こうほか こせい へつ こうぞく こうもつ うし ほう
弗父何より代々宋の卿たりし孔父嘉まで五世、それより別に公族となり、孔を以て氏とす。防
しくとき くはし わさわひ さげ ろ にははしる。しくりやうこつ いたり しし めとり しよ なんし
叔の時、華氏の禍を避て、魯にはしる。叔梁紇に至て、施氏に娶て、九女あれとも男子
なし。そのしやうもうひ うみ あし やまひ のち おひ こん かんし もとめ ちやうさい ちやう
其妾孟皮を生しに、足の病あり。後に老て、婚を顔氏に求て、徴在をめとる。徴
さい づき りやうこつ おひ なんしなか おそれ わたくし しきう やま いのる すへてしよしよ どうい
在すてに往て、梁紇の老て男子無らんことを懼て、私に尼丘の山に祈。総而諸書の同異
はこと／＼くに記せす。[1オ]

(挿絵) [1ウ] [2オ]

【2 麒麟玉書】

孔子のいまた生れさせ給はさるとき 麒麟あり。きたり きよくしよ はき すいせいし しう つひ そわう
孔子のいまた生れさせ給はさる時、麒麟あり。来て玉書を吐しに、水精子、周に継て素王
たらんといふ文あり。顔氏これを異なりとして、繡紵を麟の角に繁られしに、信宿て
さり
去ぬ。[2ウ]

(挿絵) [3オ]

【3 誕聖降祥】

しう れいわう とき ろ しやうこう
周の靈王の時、魯の襄公二十二年十一月庚子に、孔子生れ給ふ。このとき ごせい せい
ろうには くだ にりやうしつ めぐり かんし ほう きんてん かく くうちう こへ かん せいし うむ
老庭に降り、二龍室を繞、顔氏の房に鈞天の樂きこへ、空中に聲ありて、天感して聖子を生。
[3ウ]

【4 天樂文符】

ゆへ くはらく くだす いしつ ひやうむね ふん せいさくていせいふ
故に和樂の音を降といふ。生れさせ給て、異質四十九表胸に文ありて、制作定世符といふ。
襄公二十一年十一月庚子なりとも云。周正十一月を明年に属するゆへ誤とも云。[4オ]

【5 戲陳俎豆】

孔子三歳にならせ給時、しくりやうこつおはり わらは きゝ つね そとう
孔子三歳にならせ給時、叔梁紇終ぬ。孔子、兒として嬉戲せらるゝに、常に俎豆〔まつ
りのどうく〕を陳、禮の容を設てあそひ給に、そのたちふるまひ常ならず。學給はすして、
まなひ
はくし給。外／＼の子共にもうつり及ければ、御名國／＼え聞たり。[4ウ]

(*ルビの「はく」は「よく」の誤りか)

(挿絵) [5オ]

【6 筮仕委吏】

孔子^{まつし}貧^{いやし}く賤^{ひと}かりき。長^{ひと}せらるゝに及^{およひ}て、委吏^{いり}〔やくき〕とならせたまひ、委積倉庫^{つみおきくら}を主^{つかさとり}給^{かんせう}に、會計^りも理^{あたり}に當^{つもり}、料量^{はかる}も平^{たいらか}なりしとなり。〔5ウ〕

(挿絵) [6オ]

【7 載官乗田】

そのゝち司^{ししよくり}職吏^{やくき}〔やくき〕とならせ給。犠牲^{いけにへ}を養^{やしなひ}おく所^{ところ}を司^{つかさとり}給^{けものみな}に、畜^{けもの}皆^{みな}やすんして美^{よく}なりたり。〔6ウ〕

(挿絵) [7オ]

【8 賜鯉名児】

孔子^{そう}宋^{けんくはん}の干^{めとり}官^{よくねん}氏^{もふけ}に娶^ろ給^{しやうかうこひ}て、翌^{たまはる}年^{きみ}御^{きみ}子^{みこ}を設^{たまはる}らるゝ時^{とき}、魯^ろの昭^{しやう}公^{こう}鯉^{こひ}を孔子^{たまたる}に賜^{たまはる}ゆへ、君^{きみ}の賜^{たまはる}を榮^{あきな}なりとせられて、名^なを鯉^りと付^{つけ}させ給^{あきな}。字^{あきな}は伯^{はく}魚^{きよ}といふ。年^{とし}五十^{ごじゅう}になりて孔子^{さきたち}に先^{さき}て卒^{しゆつ}す。その子^こ名^なは偁^{きふ}、字^しは子^し思^{しう}、中^{ちう}庸^{よう}を作^{つく}る。〔7ウ〕

(挿絵) [8オ]

【9 問礼老聃】

(挿絵) [8ウ]

孔子^{なんきうけいし}、南^{なん}宮^{きう}敬^{けい}叔^しとともに周^{しう}にゆきて、礼^{れい}を老^{ろう}子^しに問^{もん}はせ給^{あきな}ふ。周^{しう}より反^{かへり}給^{かへり}ひて、弟^{てい}子^します進^{しん}となり。〔9オ〕

【10 学琴師襄】

(挿絵) [9ウ]

孔子^{きん}琴^{ししやう}を師^{まなひ}襄^{ます}に學^{まなひ}給^{ます}ふに、十^{じゅう}日^{にち}にあまれとも進^{しん}給^{ます}はす。師^{まなひ}襄^{ます}も益^{えき}へしといへは、いまたその数^{すう}〔みち〕を得^えすとのたまへり。間^まありて、いまた其^{その}志^{こころさし}を得^えす。又^{また}間^まありて、いまたその人^{ひと}となりを得^えすとのたまひしに、間^まありて文^{ぶん}王^{わう}にあらすんは、誰^{たれ}かこれ^{これ}をなさんとのたまひければ、師^{せき}襄^{さけ}席^{さい}を避^{さけ}て再^{さい}拜^{はい}し、いかにも文^{ぶん}王^{わう}操^{そう}と申^{まを}なりと云^いへり。〔10オ〕

【11 在齐聞韶】

(挿絵) [10ウ]

魯^{みたれ}乱^{らん}て、孔子^{せい}齊^{せい}の國^{くに}に適^{ゆき}給^{ゆき}、景^{けい}公^{こう}に通^{つう}する事^{こと}もあらんやと、高^{こう}昭^{しやう}子^しか家^か臣^{しん}となり給^{ころ}し比^ひ、

太師と樂の事を語給、韶音を聞習て、三月ほとも肉の味を覚え給す。齊にて樂をなすこと、かほとまでに至んとは凶さりしとのたまひしを、齊人いひあへり。三月を音の一字に作ともあり。これを學こと三月ともあり。聞とは學こゝろなりとも云へり。[11 才]

【12 嬰沮齊封】

(挿絵) [11 ウ]

齊の景公おり、政を孔子に問れし時、君臣父子の事をのたまひ、政は財用をよきほとなす事などをとき給ければ、景公悦給て、尼谿と云ふ所をもて封せんとせられしを、嬰嬰進出てとめしに、その後も齊の大夫等孔子を害せんとせり。景公も、吾老たり、用ことあたはし、とありけるゆへ、孔子遂に魯に反給ふ。[12 才]

【13 退脩授業】

(挿絵) [12 ウ]

魯の定公立れし後、季氏公室を僭〔ひところふ〕して、陪臣國の政を執て正道をはなれたり。ゆへに孔子仕させ給はず、退て、詩書を脩、樂を正し、礼を定たまひて、弟子彌衆。遠方より来て、業を受しとなり。[13 才]

【14 為宰中都】

(挿絵) [13 ウ]

孔子御年五十一の時、魯の定公孔子を中都宰となし給しに、中都よく治ければ、一年程のうちに四方みなその法にしたかひたり。それより司空になり、大司寇にならせ給ふ。[14 才]

【15 夾谷会盟】

(挿絵) [14 ウ] [15 才] [15 ウ] [16 才]

定公十年の春、齊と和好し、夾谷といふ所にて好會を為しに、孔子かひそへを勤給ふ。獻酬の礼畢て、齊のやくにん進て、四方の樂を奏せんと景公へ申て、舞にことよせて於鹿、矛戟などもち、鼓噪て至。孔子いそき出て、袂を擧てのたまふは、両君好を為給て、夷狄の樂何か為。やくにんとも却よ、とありけれども、去さりければ、孔子左右に晏子と景公とをきつと視給へは、景公心に忤て、靡て去しむ。頃ありて、また、齊のやくにん進て、宮中の樂を奏せんとて、優倡侏儒戲をなしければ、孔子またいそき出て、匹夫にして諸侯を榮惑する罪誅へし。やくにんに命して、法を加んとありければ、景公おそれてなすことの義にあらざるをしりて帰て、大に恐らるゝとなり。[16 ウ]

こうし じせきづかい
孔子事跡圖解卷之中

【16 帰田謝過】

けいこうかへ おそれ しんか ろ くんし みち もつて きみ たすく ら
景公帰られて大に恐、臣下ともにむかひ魯にては、君子の道を以その君を輔。なんし等
えびす みち もつておしへ つみ ろ つかひ おかし ところ
夷狄の道を以教しゆへ、罪を魯の君に得たりとて、使を魯につかはし、さきに侵とる所
うん ふんいやう きいん
の鄆、汶陽、龜陰と云ふ所の田を魯にかへして、過を謝しぬ。[1オ]

(挿絵) [1ウ] [2オ]

【17 誅乱両観】

(挿絵) [2ウ]

とし たいしこう ろ たいふ まつりこと みたすしやうせいほう ころし ろ
孔子御年五十六、大司寇たりしとき、魯の大夫の政を乱少正卯と云ふ人を誅給て、魯
こく
國の政をきゝ給ふとなり。[3オ]

(挿絵) [3ウ]

ろ まつりこと きい ひつしふた うる あたひ かさら みち
孔子魯の政を聞給て、三月はかりに羔豚を粥もの賈を飾す。男女は塗をさけてゆき、道
すたれ ひろふ をうらい りよしん さと いたる みないへ かへる
に遺たるを拾ものなし。往來の旅人の邑に至ものは、皆家に帰やうにおもふとなり。[4オ]

【18 受樂遯行】

(挿絵) [4ウ]

まつりこと なし おさまり せい おそれ
孔子の魯にて政を為給ふて、よく治たるを、齊人きゝて懼、孔子政を為給はゝ、魯國
はわう わか ち あは りそ まづこゝろみ ほいま
は霸王たらん。霸王たらは我齊の地は并さるへしと云へは、犁鉏と云ふもの、先嘗に沮ん
とて、齊の國中の女子好もの八十人を選て、文衣をきせて舞しめ、并に文馬三十駟
かほよき えらひ あやあるころも まは ならひ うつくしきむま し
を魯の君に遺しに、その女樂文馬を魯の城のみなみ高門の外に陳て、季桓子ひそかに再三
きみ おくり しようふん は しろ ころもん そと つらね きくわんし さいざん
ゆきてけんぶつし、魯君に申せしに、君もゆき觀こと終日なりしに、卒にその女樂を受て、三
おこたり つい かり
日ほとも政を怠ければ、孔子遂に行給ふ。[5オ]

【19 匡匡自信】

さり ぬい ゆき
孔子魯を去て衛に適給ひしに、いつはりうつたふる人ありて、十月はかりに、また陳に適給
はんとて、きやう
匡と云ふ所にゆきたり給ふ。このとき、かんこくしたがひ きたり
顔刻従て来しに、此匡と云ふ所は、往
き いやう こ ほう かんこく ころ かたち いやう こ るい
昔に陽虎[5ウ]来て暴せし所にて、顔刻その比も来しに、孔子の状も陽虎に類せしとて、
きやうひと きき とゝめとらふ
匡人往昔の陽虎とおもひて、孔子を止拘こと五日はかり。孔子従者を衛の甯武子か為に衛
しん ところ かり
に臣とし、此處を去給ふ。[6オ]

【20 反蔡問津】

孔子^{ちん}陳より蔡に遷^{さい}、又葉にゆき給て、蔡に反^{さい}給ふ時^{かへり}、長沮^{とき}、桀溺^{ちやう}と云ふ二人のもの、耦^{くわう}して〔ふたつすきにてならひ〕耕^{さい}居たるゆへ、子路をして津^{かへり}を問しむるに、長沮かの輿^{くちほみ}を執ものは誰そと問。孔丘なりと答れば、長沮、魯の孔丘ならば津^{わしたば}は知つへしと云ふ。桀溺^{くちほみ}に間に、桀溺、子路にむかひて、なんしは誰そと云ゆへ、仲由なりと答ふ。孔丘の徒^{くちほみ}かと問たるに、そのとほりなりと云ふ。桀溺答て、滔々者天下の治亂、何方も皆同、此を捨て、彼に適^{かへ}、誰ともに易ん、且而その人を〔6ウ〕避。士に從^{さる}より世を避。士に從^{さる}に若んやとて、擾^{たねをほひ}して居たりければ、孔子憊然給ひて世を避て山林に居らは、鳥獸と羣を同^{むれ}するなり。天下道あらは易^いことなし。道なきゆへに易んと欲^{ほつす}るなりとのたまひし。〔7オ〕

【21 習礼宋郊】

孔子衛を去給て、曹より宋に適^{そう}、弟子〔御てし〕と大樹の下にて、禮を習し給しに、宋^{そう}の司馬桓魋と云ふもの、孔子を殺んと其樹を抜。弟子速^{おほひなる}に去給、と孔子に申せは、孔子、天より予〔7ウ〕に天下の英才を教^きそたてよとの事なれば、天に違^{れい}て予を害する事あたはし、と仰^{おほせ}られしとなり。〔8オ〕

【22 東門貽誚】

〔挿絵〕〔8ウ〕

孔子宋を去て鄭に適給ふに、弟子ちり／＼になり、孔子東門の外に立給ふ。鄭人、子貢にむかひて、東門に人あり。其顙^{とうもん}堯に似たり。其項^{そのひたひきやう}臯陶に似たり。其肩子産に類せり。腰より以下、禹に及^{そのかたしさん}さること三寸、こゝろのまゝならず、病^{るい}るさまにて、喪家の狗のことしと云ふ。子貢そのまゝ孔子に告しに、孔子笑^{こし}給て、顙項肩腰、わか形状の似たることはあるまし。喪家の狗のことしといふは、さもあるらん／＼とのたまひし。〔9オ〕

【23 次乗衛靈】

孔子また衛に反^{あゐ}給ふて、蘧伯玉か家を主とし給しに、靈公夫人南子と車^{きよま}を同^{おなじう}して出。孔子にとものりさせ給。市にあそひたはふれられしゆへ、孔〔9ウ〕子醜とし給て、徳を好^{このむ}こと、色を好^{このむ}か如^{ごとく}するものを見ずとのたまいて、それより衛をさり給ふ。〔10オ〕

【24 陳庭弁矢】

孔子それより陳に至^{ちん}給て、司城貞子か家を主とし給ふ比、隼^{ころ}あり。陳の庭に墜^{ちん}て死す。楛矢にて射貫たり。石の磬にして、矢の長さ一尺八寸あり。潛公使^{ひんこうつかひ}をつかはして孔子に問^{とふ}。

孔子こたへて、此肅慎の矢なり。昔武王商に克て、道を九夷百蠻に通す。各其方の賄を
貢しむるに、肅慎より楛矢を貢き、石の弩にして、矢の長さ一尺八寸あり。此矢を大姫に分
て、虞胡公に配して、陳に封す。試に故府〔くら〕に求よとのたまひしに、果て府にあり
しとそ。〔10ウ〕弩の長さ一尺八寸ともいへり。〔11オ〕

【25 寄心撃磬】

孔子、陳に居給こと三年、所々より陳を伐侵さはかしかりしゆへ、陳を去て蒲に過しに、
こゝもさはかしかりければ、遂に衛に適給ふ。靈公喜て迎られたれとも、老て政に怠、
孔子を用さりし。或時孔子〔11ウ〕磬を撃て居給おりふし、門前にゆきかゝりたる簣を荷
者ありしに、心ある磬の音色よ、といへけるに、しはらくありて、鄙哉、人の己を知こと
なくは、そのまゝにして、世に随て己を行へし。水の深を濟には、帯のうへまでもかゝ
け、淺には膝までもかゝくへし、といへければ、孔子きゝ給て、世の中をおもひ果たること
かなかくおもひ果は、人のうへに難ことはあるまじとのたまひし。〔12オ〕

【26 臨河傷類】

孔子衛に用られざるゆへ、西の方晋に入て、趙簡子を見んとて、河に至給に、簡子此時
寶鳴、犢〔12ウ〕舜華を殺せしよし聞給て、此河を濟さるは命なり。寶鳴、犢舜華は晋の
賢大夫なり。趙孟また志を得さりし時、此兩人を須て、政に従き。已に志を得て、これを殺す。
鳥獸すら不義におみてはこれを避、況や人をやとのたまひて、衛に還給ふ。〔13オ〕

【27 礼衰去衛】

孔子衛に反て、蘧伯玉か家を主とし給ふ。他日、靈公孔子と語ありけるに、おりふ
し雁の飛度ければ、靈公仰てこれを視給、孔子と語に心なき顔色なれば、怠に形
とて、遂に去て、復陳に如給ふ。〔14オ〕

【28 厄陳絶糧】

孔子陳蔡の間に在たる時、楚より人をして孔子を聘せしむ。孔子往んとし給比、陳蔡にて
曰けるは、孔子は聖賢なり。譏ところ皆諸侯の疾にあたる。今楚は大國なり。楚にて用ら
れば、陳蔡は危からんといひ合て、徒役〔やくふ〕を發〔おこし〕して、孔子を野に圍て、
糧を絶し。従者は皆病けれども、孔子は講誦絃歌し給ぬ。子路は愠見、子貢も顔色か
はりけれども、顔回はひとり夫子の道至て大なり、故に、天下よく容ことなし。道の修

さるは吾醜なれども、道已 [14 ウ] 大に 修て用さるは国を有者の醜なり。容られずして君子なること見ゆるといへは、孔子 欣笑給、顔氏の子同じ志にそとのたまひし。子貢を楚へつかはされしに、楚の昭王師をおこして孔子を迎られしゆへ 免給ふ。 [15 オ]

【29 楚封見沮】

(挿絵) [15 ウ] [16 オ]

孔子楚にゆき給てより、昭王七百里の地を以て孔子を封ぜんとせられしに、令尹子西といふ者沮て、孔子に地をあたへ、顔回、子貢、子路、宰予の賢弟子佐てなさは、楚の福にあらずと云けるゆへ、昭王止給ぬ。孔子楚よりまた衛に反給ふ。 [16 ウ]

孔子事跡圖解卷之下

【30 季康幣迎】

魯の大夫季康子父桓子云おきしこともあり。又このせつ冉有将帥として、齊に克しも、軍旅のことを孔子に學たるよしを申せしゆへ、康子幣 [まきもの類] を以て孔子を迎、孔子魯に帰給ふ。このとき孔子御とし六十八にならせ給ふ。 [1 オ]

(挿絵) [1 ウ] [2 オ]

【31 刪述六經】

(挿絵) [2 ウ]

孔子魯に帰給とも、魯にて用ゆることもなし。孔子も仕んことを求給す。書を叙し礼記を傳、詩を刪樂を正し、易の象、象、繫、說卦、文言を序し給。弟子三千人、身の六藝に通ずる者、七十二人ありとそ。 [3 オ]

【32 著作吉成】

(挿絵) [3 ウ]

孔子著作既成て、齊戒し、北斗に向て、備ことを告給。忽赤虹ありて、天より下、化して黄玉の刻文となる。孔子 跪て、これを受給となり。 [4 オ]

【33 西郊泣麟】

(挿絵) [4 ウ]

魯の哀公十四年の春、西の方大野に狩す。叔孫氏麟を獲たり。人これを識ことなし。五父の衢に棄。麋の身にして、肉の角あり。天の天ならん耶といへるゆへ、孔子往て觀たまひ泣て、

麟なりとのたまふ。麟は仁獸なり。出て死するは吾道の窮なり、とてなげき給ふ。叔孫氏の車子鉏商といふもの、麟を獲たりともあり。薪を大墅に採るとき獲たりともいふ。不祥として、虞人に賜ともあり。郭外に棄ともいふ。[5オ]

【34 夢奠兩楹】

孔子病給ければ、子貢きたりて見んことを請。おりふし、孔子杖を負て、門にあそひ給。汝きたること、何おそきや、とのたまひ、泰山其頽乎、梁木其壞乎、哲人其萎乎、と

うたひて、天下の道なきことをなげきたまふ。[5ウ]

(挿絵) [6オ]

【35 葬魯泗上】

(挿絵) [6ウ]

後七日にして、孔子卒す。魯の哀公十六年四月己丑なり。御年七十三にならせ給。魯城北、泗の上に葬。弟子皆心喪すること三年にして、相談て去しに、各復哀を盡、あるひは復留ものもあり。唯子貢は、塚の上に廬して、六年おりしとなり。

四月十八日乙丑あり、己丑なし。己丑は五月十二日なり。日月あやまりあらんといふ。生給年明なら給は、寿数も忘れかたしともいへり。襄公二十二年十一月庚子に生、哀公十六年四月己丑に卒、年七十三、定説ともいへり。[7オ]

弟子そのほか魯国の人ゆきて、塚の邊側に家するもの [7ウ] 百餘室ありければ、其處を孔里と命ぬ。[8オ]

【36 漢高崇祀】

魯世々歳時に孔子の塚に祠を奉し、後世に至て、孔子の衣冠琴書を廟に藏。[8ウ] 漢の代に至て、二百餘年絶されは、高皇帝魯に過て、太牢を以て祠給となり。[9オ]

【37 觀廟敬器】

孔子魯の桓公の廟を觀給しとき、敬器あり。廟を守ものに、これを何の器と謂そと問給しに、蓋宥坐の器と為と對ぬ。孔子のたまふに、吾聞、宥坐の器虚ければ敬、中なれば正、正しく、満れば覆、明君至誠とす。ゆへに常に坐の側におけりと顧て、弟子にのたまふて、試に [9ウ] 水を注しむるに、中なれば正しく、満れば覆。孔子歎し給て、それ物いかてか満て、覆さるものあらんや、とのたまひしとなり。周廟を觀給しときのことなりともいへり。[10オ]

ふるく
附録

孔子の故舊〔ふるきなしみ〕に原壤といふもの、孔子の来給を俟に、両足を申て夷していたりければ、孔子のたまふに、幼してしたかふこともなく、長て善こともなく、老て死せざるは、人の害なるぞとて、曳給ふ杖にて其脛を微叩給ひ戯て、夷することなからしめんとし給ふ。

叩は文の誤なり、指に作へし。其脛を指て、夷踞の罪を知しむともいふ。〔10ウ〕

〔挿絵〕〔11オ〕〔11ウ〕

季桓子井をほりて、土缶の如ものを獲たり。其中に羊あり。使を孔子につかはして問しむるに、孔子のひろくものをしり給をはからんとて、狗を得たりとおはしむ。孔子きゝ給て、丘か聞所を以すれば羊ならん。土の怪を羴羊といふとのたまひぬ。〔12オ〕

呉王夫差越を伐て、會稽を墮。巨なる骨を獲たり。一節車に專なり。使をつかはして孔子に問。骨何をか大なりと為そと問しむ。孔子のたまふに、昔禹羣神を會稽山にいたす。防風氏後て至。禹殺て、これをさらす。其骨車を專にす。これを大なりと為と答給ふ。呉より魯に来聘せしとき、宴飲のおりふしに、孔子に問ふともいへり。〔12ウ〕

〔挿絵〕〔13オ〕

楚昭王江を渡とき、江中に物あり。大さ斗の如、圓にして赤。王の舟に觸ゆへ、舟人これを取あけし。王大に怪て人々に問れしに識ものなし。使を魯につかはして、孔子に問しむるに、孔子、これは〔13ウ〕萍實なり、剖て食へし、吉祥なり、とのたまへり。使かへりてかくと申せしに、王これを食は、大に美なり。其後使来て、魯の大夫に告。大夫子游をもて、何ゆへにかく知給と孔子に問は、孔子、昔鄭にゆきて、陳の野を過しとき、童謡をきゝしに、楚王江を渡て、萍實を得。大さ斗の如、赤こと日の如。剖て食は甜こと蜜のことしといへり。これ楚王の應なり。ゆへにこれを知とのたまへり。〔14オ〕

孔子齊に適給、途中にて、哭者の聲甚哀を聞給。哀ことは哀けれども、喪者の哀にあらずとて、車を駆て進給に、異人ありて、鎌を擁、索を帯にして、衰たるかたちなし。孔子車より下給、何人そと問給に、吾は丘吾子なりと對。奚哭ことの〔14ウ〕悲きと問給は、吾三の失あり。晩覺て悔とも及す。吾少とき学を好、天下を周偏す。後還に親を喪へり。是一なり。長て齊の君に事。君驕奢て士を失。臣の節遂す。是二なり。平生厚交たれとも今皆離絶す。是三なり。樹静ならんとすれとも風とゝまらず。子養んとすれとも親待す。往て来さるものは年なり。再見へからさるものは親なりといふて、遂に投水て死ぬ。孔子きゝ給、これ戒とするに足とて、弟子を召れ識おけよとのたまひし。

〔15オ〕

孔子^{たん}邾^{ちん}にゆき給^{たま}とき、程子^{ていし}に塗^{みち}に遭^あへり。蓋^{きぬかさ}を傾^{かたむけ}て語^{ものかたり}、終日^{しゅうじつ}甚^{はなはた}相親^{あひしたむ}。子路^{しろう}を顧^{かへりみ}て束帛^{たばはく}〔まきもの〕を取^{とり}て先生^{せんせい}に贈^{おくれ}とのたまふ。今^{いま}程子^{てんか}は天下^{けんし}の賢士^{けんし}なり。こゝにて贈^{おくれ}らすは〔15ウ〕終身^{しゅうしん}見^{みる}ことあたはしとのたまひし。〔16オ〕

〔挿絵〕〔16ウ〕〔17オ〕

魯^をの季平子^{きへいし}と邱昭伯^{こうしやうはく}と雞^{にはとり}を闘^{たゝかは}しむるに、季氏^{きし}は芥子^{からし}を雞^{にはとり}の羽^はに播^{ほとこし}、邱氏^{こうし}は距^{けつめ}を金^をにてつゝめりといふ。膠^{にかは}と沙^{すな}とを羽^はにぬりて介^{よるひ}となせし。ゆへ介雞^{かいけい}といふともいへり。孔子事跡圖解卷之下 終〔17ウ〕

孔子事跡圖解の後に書す

往昔^{きき}に孔子^{こうし}行^{しきやうしやう}状^{つかい}図解^{こう}と号^{あつさ}せしを、梓^よに上^{おこなひ}て、世^{かんぶん}に行^{かき}しに、漢文^{ひろく}のまゝに書^{かき}たれば、博^{ひろく}世^よに行^{おこなはれ}かたく、図^つも亦^{また}巧^{たくみ}ならさるに似^にたり。積年^{せきねん}これ^ををうれひて、和解^{わげ}の看^みやすく、図^つの目^めを娛^{たのし}め、世^よの郎君^{わか}常^{こつね}に玩^{もてあそび}給^{たま}て、入学^{にうかく}の一助^{いちしよ}ともならんことをねかひしに、其^{その}たよりを得^えさりき。此^{この}比^{ころ}、瑞陽^{ずい}先生^{やうせんせい}の案下^{あんか}に侍^{はへり}しおりふし、里見^{さとみ}君^{みん}来^{くきたり}給^{たま}て、ものかたりの次^{ついで}、聖跡^{せいせき}のことに及^{およ}しに、その幼^{いとけな}時^{とき}、先生^{せんせい}其^{その}図^ずを示^{しめし}、口^{くち}つから説^{とき}給^{たま}しよしをきゝて、これ高英^{こうゑい}積^{せき}〔18オ〕年のうれひなりしに、今^{いま}其^{その}語^ごを聞^きけり、今^{いま}其^{その}たよりを得^えたり。幸^{さいはひ}なんぞこれより甚^{はなはた}からん、具^{つぶさ}に口授^{くしゆ}せられんことを請^{こひ}て、天民^{てんみん}、鸞洲^{らんしゅう}二先生^{にせんせい}に就^{つき}て図^つを需^{もとめ}しに、是^{これ}も亦^{また}需^{もとめ}のまゝに応^{おう}しられ、速^{すみやか}に三卷^{さんくわん}の書^{しよ}となり、孔子事跡圖解^{こうししせきつかい}と命^なづく。高英^{こうゑい}が積年^{せきねん}のうれひも、漢文^{かんぶん}の看^みやすからさる蒙^{もう}とゝもにひらきぬ。

文化二年乙丑秋七月 嵩山房隱者高英識

杉田金助刻〔18ウ〕

解題

孔子事跡図解 瑞陽先生口授、天民・鸞洲二先生画。三卷三冊。嵩山房、文化二年（1805）刊。

底本の奥付には嵩山房小林新兵衛（高英）の名が記される。別の版本では、岡田屋嘉七との連名や三都の本屋九軒との連名、さらに、嵩山房小林新兵衛のみの場合でも複数のバリエーションがあることから、本書が複数回にわたって重版されたことがわかる。

序文と跋文には、本書刊行の経緯が記されている。跋文によれば、小林新兵衛は、以前刊刻した『孔子行状図解』（小林高英述、高田円乗画。寛政元年（1789）刊。以下『行状図解』）に対して、長年遺恨を持っていた。本書の刊刻では童蒙の役に立つ書籍たることを目指し、漢文の本文を読みやすい漢字仮名交じり文に改め、図の質を向上させることにより、「積年のうれひ」を晴らすことができた。また、刊刻のきっかけとなったのは、瑞陽先生（序によれば小林新兵

衛の叔舅)のもとでの「里見君」との邂逅だったという。「里見君」とは、序を記した「張府里景龍」その人と思われるが、尾張の人ということ以外、詳細は不明である。

跋文冒頭に『行状図解』が挙げられているために、『行状図解』および『行状図解』が祖本とする明・呉嘉謨『孔聖家語図』(万暦17年(1589)序。以下『家語図』)と、本書との影響関係について従来言及されている。しかし、本文を比較すると多くの相違点が見られる。相違点を大きく分けると、挿話の有無と次序、図に描かれた孔子の事跡を説明する本文である。

挿話の有無については、『家語図』と『行状図解』が収録する「訪樂萇弘」、「請墮三都」、「觀臺積麩」の三話が『孔子事跡図解』には無い。また、挿話ではないが、『聖蹟図』冒頭に置かれることの多い孔子の図像も、『孔子事跡図解』には見えない。一方で、『孔子事跡図解』は本編のあと、「附録」と称して、本編で取り上げていない挿話も載せている。

挿話の次序で特に目立つ点として、『家語図』では第12図、『行状図解』では第11図の「觀周敬器」が、『孔子事跡図解』では本文末尾に置かれていることが挙げられる。また、『家語図』と『行状図解』は周の廟に行ったときの話とするが、『孔子事跡図解』では魯の廟としている。

説明文については、【19 困匡自信】を例に挙げてみる。『家語図』と『行状図解』では、孔子が「文王既に没し、文茲^{ココ}に在りや」と歌ったところ、兵士が人違いに気づいたとする。一方、『孔子事跡図解』では、「従者を衛の甯武子^{しうしや ぬい ねいふし ため}か為に衛に臣とし」たことによって、難を逃れたとしている。これら二つの話は、いずれももともと『史記』孔子世家に見えるものである。『孔子事跡図解』が収録する話は、『家語図』に先行して成立した、張楷『聖蹟図』(正統9年(1444)序)、その後継の何廷瑞『聖蹟図』(弘治10年(1497)刊)と一致し、張楷本の系統と『孔子事跡図解』との近さを示しているのである。

以上のように『孔子事跡図解』は、従来言われてきたように『家語図』との継承関係がある程度認められる一方で、張楷本の系統とも近い関係を持つことが明らかである。張楷本との近さは、やはり「童蒙に役立つ書」を目指した結果なのであろう。

【参考】加地伸行『聖蹟図にみる孔子流浪の生涯と教え 孔子画伝』集英社、1991年。

竹村則行『『孔子聖蹟図』和版集成』花書院、2014年。

永富青地「江戸期における『聖蹟図』の出版について」(『中国—社会と文化』第33号、中国社会文化学会、2018年)。

許永晝『寛政の聖蹟図 『孔子行状図解』と文人藝術の創生』文人画研究会(発売 汲古書院)、2023年。

※本稿は、科学研究費・基盤研究(C)・18K00282による研究成果の一部である。